

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 29 日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26289222

研究課題名(和文) 建築制作における建築家と施主・施工業者・他分野専門家との協働：村野藤吾をめぐって

研究課題名(英文) Collaboration between architects, clients, contractor and other field experts in architectural works by Togo Murano

研究代表者

松隈 洋 (Matsukuma, Hiroshi)

京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・教授

研究者番号：80324721

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,100,000円

研究成果の概要(和文)：村野が設計した住宅の施主や、村野の最大の施主であった近鉄(近畿日本鉄道)グループについて、文献や現地調査などを通じて調査し、建物の建設経緯、施主と村野との関係を明らかにした。図面資料の調査により、これまで知られていない多数の作品を発見したほか、施主の要求に応じて柔軟に設計する村野の様子が明らかになった。また、村野の建築設計事務所の元所員にインタビューを行い、村野の仕事の進め方や所員との関係を尋ねた。事務所では、村野を中心にピラミッド型の組織運営がなされ、仕事が進められていたことなどが明らかになった。これらの研究成果は、展覧会の開催とその図録を発行、また研究雑誌を発行するなどして公開した。

研究成果の概要(英文)：This is the study about the relationships of architect Togo Murano and his clients, staffs of his office, construction company and artists, who supported and helped Murano's works. We focus on clients of architect Togo Murano's residence works and Kintetsu railway company which was most important client for Murano. We found a lot of his unknown works by researching his drawings. We also found that he worked for and made a lot of buildings according to owners demands. We interviewed to the former staff of Murano's architect office how did he arrange his works and relation with staffs. We found that he introduced Pyramid style system and he had strong leadership in his office. It was not so general thing compared to another famous Japanese architects in same age. We held exhibitions of Murano and issued catalogs of these, we showed results of these studies.

研究分野：近代建築史

キーワード：村野藤吾 施主 施工者 アーティスト

1. 研究開始当初の背景

近年、近代建築研究が盛んである。日本においては明治以降、また特に1920年代から30年代にかけて欧米で生み出されたモダニズム建築は、すぐさま日本にももたらされ、機能性や合理性を重視し、鉄やコンクリートを用いて、無装飾で抽象的な形態によって造られる建築が目指された。だが実際の日本の都市や社会では、1930年代にあっても、未だ装飾的な建築が大衆を魅了し、様式的な建築が造られ、伝統的な技法に基づく木造建築が建てられていたという現実がある。つまり、近代建築研究においては、新しい近代建築の理念や方法だけを追求していても、近代建築の現実を捉えることができないと言える。

建築家についての研究についても、同様の新しい視点が必要である。従来の建築家の研究は、実際に建設された建築作品の意匠や技術の研究、建築家の言説を通じた思想や人物の研究など、建築家本人の理念や活動、方法、作品に着目するものであった。それは基礎的な研究としては重要であるが、建築家についての研究としては限界がある。なぜなら、現実の建築家の作品は、建築家に設計を依頼した施主の思想や経済状況、趣味、また施工業者と建築家との関係や技術力、建築事務所の運営体制や所員の才能、また建築家の作品に関わる芸術家や建築以外の分野のデザイナーとの関係など、いわば建築家を支える人々や組織との関係の中でこそ成立するものである。建築家の周囲との関係なくして、建築家の活動の現実を捉えることはできない。

こうした背景の中で本研究は、建築家村野藤吾(1891-1984)を事例として、建築家の施主・施工業者・所員・他分野専門家との協働やその関係に着目するものである。施主は、時に建築家と深い関係を持ち、連続もしくは断続して、特定の建築家に設計を依頼することがある。そしてそこには、その施主ならではの思想や構想、趣味などが反映されることがある。また施工業者については、建築家が信頼を置き、特殊な技術を実現するために長期に渡って、特定の関係を築くことがある。施工技術の高さや信頼があつてこそ、実現する作品も少なくない。建築家の事績を捉える上で、その建築事務所の所員の能力や活動にも目を向ける必要がある。このことはこれまで看過されてきたが、所員の能力によってこそ得られた仕事や、実現した作品も多いはずであり、建築家の事績を捉える上で欠かせない事象である。また、建築家はしばしば建築以外の分野の芸術家や造園家などと協働で作品を制作することがある。その協働の中で、作品が実現するとすれば、両者の関係を捉えなければ、現実を捉えることはできない。こうした協働関係を捉えることによって初めて、従来の建築史研究の方法では捉えきれなかった多様な現実を捉え、また建築家の「創造の現場」に踏み込んだ研究が可能になるはずである。

ただし、こうした研究は、条件が揃っていないならば不可能である。その条件の1つは、その対象にふさわしい建築家の存在である。数多くの施主や施工業者、所員、他分野専門家と親密な関係を持ち、それによって作品が生まれた建築家を対象とすることが必要である。本研究では、村野藤吾を対象とするが、それは村野が、1920年代から80年代までの長期に渡って活躍し、文化勲章をも受章した日本を代表する建築家だったからである。数多くの施主や施工業者、所員、他分野専門家と親密な関係を持ち、数多くの名作を生み出した。本研究には極めてふさわしい対象である。

もう1つの条件は、研究のための資料が揃っていることである。作品集や文献資料の調査だけでこの研究を進めるのには限界がある。施主や施工業者、所員、他分野専門家との関係の痕跡が記された図面資料や、当時を知る関係者へのインタビューなどが必要である。幸い、本研究申請者の多くが所属する京都工芸繊維大学には、上記の条件を備えた建築家村野藤吾の図面資料が、5万点以上存在する。その図面資料からは、まさに施主や施工業者、所員、他分野専門家との関係の足跡を読み取ることができる。また、これまでの同学での研究により、当時を知る関係者とのネットワークも構築できている。インタビューを行う条件も揃っている。こうした背景の中で、本研究を実施するものである。

2. 研究の目的

本研究は、建築家と設計を依頼した施主との関係や施主の思想や趣味、建築家と施工業者との関係や技術力、建築事務所の運営体制や建築家と所員との関係、また建築家とその作品に関わる芸術家や建築以外の分野のデザイナーとの関係など、いわば建築家を支える人々や組織との関係を浮かび上がらせることを目的としている。

そのためには、村野が関わった施主や施工業者、所員、他分野専門家を複数取り上げ、文献調査やインタビュー、図面資料などをもとにしなが、彼らの具体的な活動や役割などを明らかにし、村野との関係を描き出すことを目指す。

施主の調査については、作品集や雑誌に発表された作品をリストアップし、未発表作品については、図面資料から情報を得て、村野と施主との関係を明らかにする。ただし、図面資料にすべての情報が載っているわけではない。わずかな断片的な情報だけで、施主がどのような人物であるのか不明な場合も少なくない。それらについては、土地台帳や社史など別の資料調査や元所員へのインタビューを通じて解明する。

施工業者との関係については、まず作品集や雑誌などの文献調査の他、図面資料から情報を得るが、具体的な関係について、より詳細な調査が必要になる。施工業者や金物や家

具の製作者、模型業者、所員へのインタビューを行い、村野が実際に建築を制作する現場の人々とどのように協働していたかを明らかにする。

所員との関係については、図面資料に記されたサインやメモなどから、誰がどの作品を担当し、またどのような関係で作品を実現したかについての情報を得ることができる。しかしそれだけでは不十分であるため、複数の元所員へのインタビューも行い、村野の活動をどのような体制が支えていたかを明らかにする。

他分野専門家との関係が数多く存在したことも、村野の活動の大きな特徴である。村野が作品を作る上で特に深い関係にあった芸術家や造園家、構造家、数寄者、学者などについての調査を行う。

このように、本研究は図面資料や文献資料、インタビューなど、様々な方法を駆使して、立体的で総合的に、村野の活動を支えた人々との関係を具体的な形で解明することを目指す。それによって、建築の「創造の現場」に踏み込んだ成果が期待できる。

3. 研究の方法

次のような手順で研究を進める。

1. 研究対象の選定および補助的資料の収集・整理

1-1. 対象とする施主・施工業者・所員・他分野専門家の選定 1-2. 対象とする施主・施工業者・所員・他分野専門家の基本データ整理 1-3. 補助的資料の収集と整理 1-4. データベース作成

最初に、研究を進める上での準備作業を行う。村野藤吾と関係のあった施主・施工業者・所員・他分野専門家は、数多く存在するため、すべてを研究対象とすることはできない。そこで、村野の作品実現にあたって非常に重要な役割を果たしたものや、頻度が高いものを複数件選定し、それらを研究対象とする。選定に際しては、雑誌や作品集、著書などのほか、図面資料を用いて情報を収集する。

研究対象の候補としては、施主では、近畿日本鉄道、大丸百貨店、中山製鋼所、そごう百貨店、宇部興産、川崎重工業、高島屋百貨店、大阪商船、湯浅伸銅、八幡製鉄、関西大学、出光興産、西武鉄道などが挙げられる。施工業者としては、竹中工務店、大林組、大成建設、清水建設、鹿島建設など大手ゼネコンの他、藤木工務店など、木造和風を実現する上で重要な役割を果たした施工業者が挙げられる。また、建設業者以外にも、村野が設計にあたって重要視していた模型製作を担当した三浦模型や、金物の上野製作所などの業者も挙げられる。村野事務所の元所員については、重要な役割を担った多くの所員がすでに死没しているが、岡林氏や齋藤氏、保科氏、時園氏、蓮見氏、大泉氏、羽間氏、千葉氏などは存命であり、候補として挙げられる。他分野専門家としては、村野の建築作品

にデザイナーや彫刻家などとして関与した、上野リチ、辻晋堂、長谷川路可、作野旦平などのほか、建築構造家として村野の作品の構造設計を担当することが多かった内藤多軒などが挙げられる。

また、上記の作業と並行して、調査のための補助的な資料の収集および整理を行う。ここで必要なのは、村野の作品について理解を深めるための写真資料の収集・整理である。村野の作品は、多比良敏雄を中心とした多くの建築写真家によって撮影されたが、その建築写真には、現在では見られない竣工当時の姿が記録されており、特に未発表作品の竣工時の姿を理解するには重要な資料となる。村野の写真資料を可能な限り収集し、現像したプリントをファイルに整理・保存し、さらにスキャナーによりデジタルデータ化して整理・保存する。

2. 研究対象についての文献調査

2-1. 施主についての文献調査 2-2. 施工業者についての文献調査 2-3. 所員についての文献調査 2-4. 他分野専門家についての文献調査

すでに雑誌や作品集、著書などで公表されている研究対象についての情報やデータを収集し、施主、施工業者、所員、他分野専門家の既知の情報について整理を行う。施主については、社史や伝記から情報を収集する。施工業者についても社史や工事報告集、竣工パンフレットなどの資料を用いる。所員については、雑誌や作品集などから、各作品の担当者を特定する。他分野専門家については、作家ごとの作品集などを通じて情報を収集する。

3. 研究対象についてのインタビュー調査

3-1. 施主についてのインタビュー調査 3-2. 施工業者についてのインタビュー調査 3-3. 所員についてのインタビュー調査 3-4. 他分野専門家についてのインタビュー調査

建築史研究は、文献や現存する建築物を対象としてきたが、近年、オーラル・ヒストリーの有効性が評価されている。本研究で対象とする村野藤吾は故人ではあるが、当時を知る関係者が存命している場合がある。前述の文献調査では明らかにならないような事実や状況について、当時の関係者にインタビューすることで判明する事実は多いと予想される。

インタビューの対象者としては、施主については、当事者はほとんど死没しているため、間接的に状況を知る施主の関係者や、元所員へのインタビューすることで情報を得る。施工業者については、長期の関係があった竹中工務店や大林組、藤木工務店、三浦模型などへのインタビューが可能である。また他分野専門家についても、当事者は死没しているため、間接的に状況を知る関係者や、元所員へのインタビューすることで情報を得る。

インタビュー内容は、デジタルデータとして記録・保存する。すでにインタビューを行

なったものはデジタルデータ化を行なう。

4. 研究対象についての図面資料調査

4-1. 図面資料の整理・保存作業 4-2. 施主についての図面資料調査 4-3. 施工業者についての図面資料調査 4-4. 所員についての図面資料調査 4-5. 他分野専門家についての図面資料調査

図面資料調査に先だて、研究のための基礎資料作成の一環として、対象とする作品を選定し、図面資料の整理・保存作業を行う。作品ごとに分類し、整理カードおよびパソコンでのデータ記入を行い、整理ケースにしまう作業を行なう。また研究対象とする作品を大型スキャナーでデジタルデータ化し、それをもとにデータベースを作成する。これらの作業に必要な機器は、既存のものを用いる。

前述の文献調査やインタビュー調査により基本的な情報を得た上で、施主・施工業者・所員・他分野専門家が特定できる作品については、図面資料から設計プロセスやメモを読み取り、整理することで、彼らとの関係を解読する。その際、意匠（デザイン）や構法、技術などの他、設計プロセスなどに注目し、その特徴や差異を浮かび上がらせることになる。

図面資料には、作品が最終的に確定するまでに作成された複数の計画案のスケッチや図面が残されている場合がある。ここでは、それらの資料を時系列に並べることで、設計プロセスや建築家と施主との関係の特徴を検討する。また意匠や技術の特徴を捉え、形の意味を読み取り、その建築理念を考察する。さらに図面資料には、詳細な技術的な指示が書き込まれていることも多く、そこから技術的な特徴をとらえることができる。これは、実現した建築物からは読み取ることのできない、図面資料ならではの研究方法である。

ただし、図面資料には、その作品の施主や施工業者、所在地などの情報が明記されていないものも多数存在する。つまり、施主・施工業者・所員・他分野専門家が特定できない図面資料がある。しかしそのような場合でも、ヒントは図面資料に隠されている。図面に書かれた情報を元に、市史、社史、企業の営業報告書、法務局の土地台帳、地図、絵葉書などを使い分け、時には企業や個人へのインタビューを行なうなどして調査する。それによって、これまで文献調査やインタビュー調査では明らかにならなかった、施主・施工業者・所員・他分野専門家についての情報が得られる。このようにして、図面資料から未知の情報を得る。

4. 研究成果

2014年度は、まず研究を進める上での準備作業を行った。研究のための基礎資料作成の一環として、図面資料の整理・保存作業を行った。今年度は施主との関係を重点的に捉えるべく、戦前の住宅に絞って、研究対象とする作品を14点選定した。

大丸神戸支店店員寄宿舍（1931年）、大丸神戸支店店員寄宿舍舎監住宅（1931年）、下村邸計画案（1932年）、大阪マンション（1932年）、中山悦治邸（1934年）、武智邸（1934年）、清流亭計画案（1937年）、親栄会住宅（1939年頃）、川崎航空機工業岐阜工場社宅（1939年）、中山半邸（1940年）、中橋邸（1940年）、村野藤吾自邸（1940年）、中林邸（1941年）、湯浅邸計画案（1943年）である。

これらについて、施主と村野の関係について、社史や伝記などの文献や現地調査などを通じて調査し、その住宅ができた経緯や理由、施主と村野との関係などを明らかにした。写真資料の収集も行った。これまでに写真家多比良俊雄らによって撮影されている写真を収集したほか、現存する建物については市川靖史の撮影により撮り下ろした。また村野の住宅について、建築史家の藤森照信氏と建築家の木原千利氏にインタビューを行い、村野にとっての住宅の意味について検討した。これらの研究成果は、第13回村野藤吾建築設計図展を開催し公開した。

2015年度は、研究のための基礎資料作成の一環として、図面資料の整理・保存作業を行なった。またこれまで10年あまりにわたって申請者らが続けてきた、一連の村野藤吾の作品について、調査や研究で取り扱った建築作品100件近くについての情報やデータを改めて収集し、施主、施工業者、所員、他分野専門家の既知の情報について整理を行った。

施主については、写真や伝記などから情報を収集し、施工業者についても社史や工事報告書、竣工パンフレットなどの資料を用いた。他分野専門家については、雑誌や作品集などを通じて情報を収集した。写真資料の収集も行った。これまでに写真家多比良俊雄らによって撮影されている写真を収集したほか、現存する建物については市川靖史の撮影により撮り下ろした。これらの調査の成果は、「村野藤吾の建築」展を開催し、図録も発行して公開した。

2016年度は、村野と施主（クライアント）との関係に焦点を当てて、調査、研究を行った。特に戦前から戦後、そして村野没後に至る約50年間にわたって、村野のクライアントであり続けた近鉄（近畿日本鉄道）グループに焦点を当てた。近鉄グループの作品から、あやめ池温泉場（1929年）、都ホテル（現・ウェスティン都ホテル京都 / 1936-70年代）、橿原神宮駅（現・橿原神宮前駅 / 1940年）、アポロ座（1950年）、志摩観光ホテル（1951-1969-1983年）、近映会館（1954年）、近鉄会館（1954年）、近鉄百貨店阿倍野店（1958-64年）、名古屋都ホテル（1963年）、佐伯邸（1965年）、上本町ターミナルビル・近鉄百貨店上本町店（1969年）、近鉄本社ビル（1969年）、賢島駅（1970年）、近映レジャービル・アポロ（現・きんえいアポロビル / 1972年）、都ホテル大阪（現・シェラトン都ホテル大阪 / 1985年）を選んで調査の対象とした。

これらの作品についての情報やデータを収集し、図面資料の整理・保存作業を行なった。その後、担当者を決めて、文献調査や建物の現地調査を行った。写真資料の収集も行った。写真家多比良俊雄らによって撮影されている写真を収集したほか、現存する建物については市川靖史の撮影により撮り下ろした。これらの調査の成果は、第14回村野藤吾建築設計図展「村野藤吾とクライアント - 近鉄の仕事を通して -」を開催し、図録も作成して公開した。

2017年度は、村野と村野の建築設計事務所の所員や施主(クライアント)などとの関係に焦点を当てて、調査、研究を行った。村野の建築設計事務所の所員として長年勤務した保科幸一氏にインタビューを行い、村野が建築設計事務所においてどのように仕事を進め、どのように所員と仕事を進めたかについて、話を伺った。その結果、事務所での仕事の進め方は村野を中心にピラミッド型の組織運営がなされ、仕事が進められていたことなどが明らかになった。また、村野の施主について、高島屋や湯浅伸銅などについて事例調査を進め、また村野の友人である松ノ井覚治についての調査も行った。これらの成果は、『村野藤吾研究』第4号を発行し、そこに掲載し公開した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 17 件)

松隈洋、松隈洋の近代建築課外授業 日本ルーテル神学大学(1969年) 柔かな光と陰影に包まれた学舎、住む。、査読無、2018年冬号、2018、134-135

松隈洋、記憶の建築 日本ルーテル神学大学 1969年 村野藤吾が実現させた神の民の学舎、建築人、査読無、2017年12月号、2017、17

松隈洋、記憶の建築 横浜市庁舎 1959年 庁舎建築に込められた公共性の行方、建築人、査読無、2017年11月号、2017、15

松隈洋、記憶の建築 甲南女子大学 1964年 気品と肌理の豊かさ漂う白亜の学園、建築人、査読無、2017年2月号、2017、11

松隈洋、DOCOMOMO 選定建築物のもつ歴史的、文化的重要性について、公共建築、査読無、第59巻第212号、2017、18-21

松隈洋、戦後モダニズム建築の歴史的な意味と価値をめぐって、月刊文化財、査読無、644号、2017、30-31

松隈洋、山本忠司の求めたもの 風土に根ざし、地域をはぐくむ建築へ、住宅建築、査読無、462号、2017、66-67

松隈洋、ル・コルビュジエと愛弟子たち、東京人、査読無、32巻5号(通巻383号)、2017、42-47

松隈洋、モダニズム建築の歴史的評価をめぐる現場から、建築と社会、査読無、98巻

1142号、2017、34-37

松隈洋、建築アーカイブが現代へ手渡すもの、建築と社会、査読無、98巻1144号、2017、42-44

G. BARNA、S. SHIMIZU、J. ISHIDA、C. LEE、INTERNATIONAL TRANSMISSION OF ARCHITECTURAL CULTURE WITH FOCUS ON THE ROLE OF ARCHITECTURAL MODELS、INTERNATIONAL CONFERENCE OF EAST ASIA OF ARCHITECTURAL CULTURE、査読有、2017

笠原一人、村野藤吾の和モダン - 和風にモダンを潜ませる -、和 MODERN、Vol.10、2017年、24-27

笠原一人、兵庫の戦後モダニズム建築(第15回)西脇市民会館、歴史と神戸、査読無、54巻5号、2015、34-38

笠原一人、近畿地区における近現代建築資料調査の概要、近現代建築資料の現状と今後の課題:近現代建築資料全国調査特別WGを受けて、2014年度日本建築学会大会(近畿)建築歴史・意匠部門パネルディスカッション資料、査読無、2014、40-43

笠原一人、京都工芸繊維大学の建築資料アーカイブとその活動:村野藤吾の建築設計図面資料を中心として、2014年度日本建築学会大会(近畿)建築歴史・意匠部門パネルディスカッション資料、査読無、2014、55-58

三宅拓也、松ノ井覚治のニューヨーク留学中の課題作品について、2014年度日本建築学会大会(近畿)学術講演梗概、査読無、2014、639-640頁

三宅拓也、松ノ井覚治の建築ドローイング、KIT NEWS、査読無、37号、2014、15-16

[学会発表](計 13 件)

松隈洋、国内の村野建築と近代建築を取巻く現状と課題、渡辺翁記念会館開館80周年記念事業「地域に生き続ける建築」、招待講演、宇部市渡辺翁記念会館、2017年9月16日

松隈洋、近代建築が問いかけるもの、国際文化会館パネルディスカッション、招待講演、国際文化会館、2017年9月6日

松隈洋、ル・コルビュジエと前川國男がもたらしたもの、江戸東京たてもの園「ル・コルビュジエと前川國男」展講演会、招待講演、江戸東京たてもの園、2017年9月2日

松隈洋、瀬戸内海に展開された戦後近代建築の意味 2017年度日本建築学会大会 建築歴史・意匠部門 パネルディスカッション(1)、現代建築の実験場としての「瀬戸内海文化圏」、招待講演、広島工業大学、2017年8月31日

松隈洋、神奈川県に見る戦後建築の出発点:坂倉準三・前川國男・村野藤吾を中心に、神奈川県立近代美術館講演会、招待講演、鎌倉商工会館、2017年8月26日

松隈洋、前川國男と神奈川県立音楽堂、日本建築学会神奈川県立音楽堂見学会基調講演、招待講演、神奈川県立音楽堂、2017年8

月 15 日

松隈洋、前川國男と神奈川県立音楽堂、神奈川県立音楽堂オープンシアター2017 講演、招待講演、神奈川県立音楽堂、2017 年 5 月 27 日

松隈洋、村野藤吾の建築：世界平和記念聖堂を中心に、広島市現代美術館「村野藤吾の建築」展講演と対談、招待講演、広島市現代美術館、2017 年 5 月 20 日

笠原一人、清家清と小原流の建築群、ひょうご歴史的建築物セミナー、招待講演、神戸市立御影公会堂、2017 年 11 月 11 日

笠原一人、建築家・沖種郎と宮津市庁舎、日本建築学会近畿支部、招待講演、宮津市福祉センター、2017 年 10 月 7 日

笠原一人、現代建築の実験場としての「瀬戸内海文化圏」 1980-1990 年代：地域に根差す建築をめざして、日本建築学会大会、招待講演、広島工業大学、2017 年 8 月 31 日

笠原一人、武田五一のセセッション受容と創作、分離派 100 年研究会、招待講演、京都大学百周年時計台記念館国際交流ホール、2017 年 7 月 8 日

笠原一人、村野藤吾の思想と方法 - 関西大学校舎群を中心に -、関西大学博物館、招待講演、関西大学、2017 年 4 月 15 日

〔図書〕(計 25 件)

松隈洋・笠原一人・三宅拓也他、京都工芸繊維大学美術工芸資料館、山本忠司展 - 風土に根ざし、地域を育む建築を求めて -、2018、84

松隈洋・石田潤一郎・笠原一人・三宅拓也・福原和則 他、村野藤吾の設計研究会、村野藤吾研究 第 4 号、2018、76

三宅拓也 他、昭和堂、描かれた都市と建築、2017、256

松隈洋 他、鹿島出版会、百書百冊、2017、383

石田潤一郎 他、LIXIL 出版、武田五一の建築標本、2017、74

松隈洋・石田潤一郎・角田暁治・笠原一人・三宅拓也他、国書刊行会、村野藤吾とクライアント 「近鉄」の建築と図面資料、2017、175

石田潤一郎・笠原一人他、鹿島出版会、日本近代建築家列伝、2017、390

石田潤一郎・松隈洋・笠原一人他、日本建築協会、モダンエッジの建築、2017、351

笠原一人他、彰国社、モダニスト再考 日本編、2017、424

石田潤一郎・三宅拓也他、日本建築協会、日本建築協会 100 年史、2017、92

三宅拓也他、思文閣出版、京都 近代美術工芸のネットワーク、2017、271

松隈洋、六耀社、モダニズム建築紀行 日本の戦前期・戦後 1940~50 年代の建築、2016、238

松隈洋、六耀社、モダニズム建築紀行 日本の 1960~80 年代の建築、2016、262

ル・コルビュジエから遠く離れて 日本の 20 世紀建築遺産、松隈洋、みすず書房、全 263 頁、2016 年

松隈洋、みすず書房、建築の前夜 前川國男論、2016、490

松隈洋・笠原一人・三宅拓也他、文化庁、建築と社会を結ぶ：大高正人の方法、2016

松隈洋・笠原一人・三宅拓也他、青幻舎、村野藤吾の建築：模型が語る芳醇な世界、2015、239

松隈洋・石田潤一郎・角田暁治・笠原一人・三宅拓也他、国書刊行会、村野藤吾の住宅デザイン：図面資料に見るその世界、2015、175

松隈洋他、岩波書店、建築から都市を、都市から建築を考える、2015、164

石田潤一郎他、ゆまに書房、写真集成近代日本の建築 19、2015、120

石田潤一郎他、竹中大工道具館、近代建築ものづくりへの挑戦、2015、110

①笠原一人他、140B、生きた建築 大阪、2015、192

②三宅拓也、思文閣出版、近代日本 陳列所研究、2015、640

③松隈洋他、技報堂出版、日本の名建築 167、2014、276

④石田潤一郎・松隈洋・笠原一人他、淡交社、関西のモダニズム建築、2014、351

⑤松隈洋・石田潤一郎・笠原一人他、大阪歴史博物館、村野藤吾：やわらかな建築とインテリア、2014、144

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松隈 洋 (MATSUKUMA, Hiroshi)
京都工芸繊維大学デザイン・建築学系・教授
研究者番号：80324721

(2) 研究分担者

石田潤一郎 (ISHIDA, Junichiro)
京都工芸繊維大学デザイン・建築学系・教授
研究者番号：80151372

角田暁治 (KAKUDA, Akira)
京都工芸繊維大学デザイン・建築学系・准教授
研究者番号：60379063

笠原一人 (KASAHARA, Kazuto)
京都工芸繊維大学デザイン・建築学系・助教
研究者番号：80303931

三宅拓也 (MIYAKE, Takuya)
京都工芸繊維大学デザイン・建築学系・助教
研究者番号：40721361

福原和則 (FUKUHARA, KAZUNORI)
大阪工業大学工学部空間デザイン学科・教授
研究者番号：50635365